

1. 3 研究論文・小論文の書き方（国語分野）

(1) 研究開発の課題（研究概要）

獲得した情報を理解し、論理的に考察・分析し、その成果を文章化して他者に示すための、論文の構成のあり方、叙述方法を学ぶ。そしてその学習を踏まえ、課題研究として研究した内容を論文にまとめる。

(2) 研究開発の経緯

4月当初から評論文の要約に取り組み、得られた情報を論理的に表現する方法を学んだ。1学期、3学期末には、テーマを与え、自らテーマに沿った題材を見つけて小論文を執筆した。2学期末には、パラグラフライティングについて理解し、課題研究のレポートを論文の形式にまとめた。

(3) 研究開発の内容

ア 仮説（ねらい、目標）

本事業は、獲得した情報を理解し、論理的に考察・分析を進める創造力・理解構成能力などの「科学リテラシー」を促すことができると考えられる。

イ 研究の内容・方法

該当教科 SSH国語総合

対象生徒 普通科1年生徒 8学級

実施場所 本校 各教室

実施内容

要約

『長文記述問題集読解力習得編』（いいずな書店）記載の評論文・小説の要約論文

- | | | |
|-----|---|---------------------------|
| 1学期 | 1 | 原稿用紙の使い方、各自の問題（テーマ）の立て方 |
| | 2 | テーマ型小論文の執筆①（相互評価・自己評価を含む） |
| 2学期 | 3 | 論文の構成のあり方 |
| | 4 | 課題研究論文執筆（相互評価・自己評価を含む） |
| 3学期 | 5 | テーマ型小論文を書く②（相互評価・自己評価を含む） |

ウ 検証（成果と反省）

1学期、評論「水の東西」（山崎正和）を読み、二項対立型小論文を書く練習をした。「水の東西」のように西洋と東洋（日本）の違いを、自分なりの切り口から論じ、日本文化の隠された一面を論じるという主旨のものであったが、単に両者の比較をすることで、その比較を通してどのような結論が見いだせたのか、にまで論が及んでいないものが大半であった。形式だけまねてみたものの、自分が何を問題としていたのか、の出発点からが曖昧であった。

2学期冬休みの論文執筆については、夏休みの課題研究を論文形式で完成させる、という認識もなく安易な取り組みがしてあったため、論文に仕上げる以前の段階（問題提起—仮説—実験—検証—結論）が破綻しているものも多く見られた。論文作成までを目標として取り組むということを周知徹底させて臨む必要が感じられた。

上記のような問題点が見られはしたが、今年度の経験を通して、論文の構成の仕方、作成の仕方については学ぶところが多く、次年度以降の研究、発表のための土台となったことは間違いがないと思われる。今後は、生徒一人一人の文章指導を行い、各自が自分の改善点を意識して改良に努めていけるように指導していく必要があると考えられる。